

## インターネット上での読み書きに求められる能力

### Lire et écrire sur Internet et les compétences requises

KOMATSU Sachiko  
小松 祐子

Université de Tsukuba  
skomatsu@sakura.cc.tsukuba.ac.jp

私たちの日常の言語使用のなかで、インターネットを用いた言語活動が占める割合が増加している。調べごとにはまずインターネットで検索してみる、電話や手紙よりも電子メールで連絡をとる、といったことが増えているのである。マルチメディア化が進むインターネットであるが、その基本は文字情報である。インターネットを用いた主な活動として、情報収集・公開、メッセージのやり取り(メール・掲示板・チャット等)が挙げられるが、現状としてその多くは読み書きに基づく活動である。インターネットを用いたこれらの活動の活発化に伴い、外国語での同種の活動機会も増加するであろうことが予想される。外国語学習においてもインターネット上での活動を視野に入れた学習や指導が必要となるであろう。

そこで本稿では、インターネット上での読み書きには、印刷あるいは手書き媒体による読み書きの場合と異なったどのような能力が必要となるのか、学習指導上注意すべき点は何であるか、を考えたい。そのための基礎資料として、筑波大学の2年生対象フランス語クラス(4クラス、88名)で行ったアンケート結果を使用する。本アンケートは「インターネットを用いた外国語学習」に関する約40の調査項目より成るが、ここではそのなかで「インターネットで外国語を学ぶ際に問題となる点」として、学生が挙げた自由記述回答を扱う(自由記述部分には88名中28名が回答した)。以下では音声に関するものを除き、学生の指摘した問題点を、その内容に従い分類し紹介する。インターネット上で外国語を用いた活動を行う際に学習者がぶつかる問題を整理し、必要とされる能力と、指導上の注意についてまとめてみたい。

#### コンピュータ基本操作

「操作できない」「接続がうまくいかない」「文字化けする」「文字化けして読めない」「文字入力の問題」

言語使用以前の問題として、コンピュータをはじめとするIT技術を使いこなすための、いわゆるコンピュータリテラシーまたはITリテラシーの問題がある。基本的な機器操作やインターネットへの接続、文字の表示や入力ができなければ、読み書きの活動を行うこと

はできない。また、パソコン画面上の「読み」には、GUI(グラフィック・ユーザ・インタフェース)の基本、さまざまなアイコンやウィンドウの持つ意味を適切に理解することが求められる。

学習者のITへの基本的習熟はインターネットを用いた外国語活動の基盤となるが、通常の外国語授業で扱い得る範囲を超えており、学習者の自主的な努力や情報教育の取組みに委ねられる部分が多い。近年の急速な情報化の進展に伴い、情報教育にはさまざまなレベルにおいて力が注がれており、ほとんどの大学で情報処理の授業が必修とされているほか、2003年度からは高等学校で教科としての「情報」が設けられ、情報リテラシーの習得が目指されている。その範囲は、後に述べる情報選択や表現・コミュニケーションの能力をも含むものであり、今後これらの取組みの成果が期待される。

一方、情報科の授業では通常扱われない外国語の文字化け問題への対処法や特殊文字の入力方法は、外国語スキルの一つとして外国語の授業内に指導を要するものと考えられる。なお、筆者が担当したインターネットを用いたフランス語授業においては、学習者の間にフランス語とコンピュータスキルの両方を同時に学べた点を評価する声が挙がっていたことを指摘しておきたい(*Bulletin RPK no.17* に掲載の拙稿参照)。

## ナビゲーション

「次にどこに進むのかわからなくなったことがある」「自分の求めるページにたどりつけない」「広告のバナーに勝手にアクセスされてしまう」

次に挙げられるのが、Webの基本的特徴であるハイパーテキスト(相互にリンクし網状構造をもつテキスト)の与える問題である。インターネット上での読みには、リンクを適切にたどるナビゲーションの技術と同時に、リニアな情報構造を持つ書物媒体による読みの場合とは異なった認知的態度が求められる。ハイパーテキストの文書構成を理解し、自らの位置を認識しつつ文書間を移動し、得られた情報を主体的に再構成する能力が必要となるのである。

このような高度な作業がとりわけ外国語で行われる際に学習者に与える困難は想像に難くない。まずは、ナビゲーション技術の向上により困難を緩和することができるだろう。たとえば、サイトメニューやサイトマップによるサイト構造の把握、リンク先の見極め(同一サイト内のリンクであるのか、サイト外へのリンクであるのか)、URL(Webアドレス)に関する知識に加え、サイト内検索機能の有効活用などが、Web上の文書を扱う際の理解の助けとなるだろう。

一方、自分の意図しないページが勝手に開かれる(ポップアップ)問題は、ユーザ側ではなくページの作り手側の倫理的問題であるが、スパムメールやウイルスメールの存在同様、インターネットにおいて避けがたい現象であるがゆえ、その対応策を心得る必要がある。

## 情報選択

「ヒット数が多すぎる」「情報の取捨選択がむずかしい」「その情報が正しいのか誤りなのか判断できない」「手に入れる情報が自分の好みに沿ったものだけになってかたよってしまわ

ないか」「仕方ないことであるが、誰かのバイアスがかかっている」

豊富な情報量はインターネットの魅力の一つである。しかし一方で、不特定多数による情報発信が可能であることから、情報が過多である点や、情報の質が保証されていない点が大きな問題となっている。利用者には適切な情報選択の能力が求められる。

このためには、まず、大量の情報のなかから求める情報を見つけ出すための検索技術の向上、適切なキーワード設定をはじめとした検索方法の習得が重要となる。また、印刷媒体の場合と同様またはそれ以上に、情報の源を特定することが大切である。信頼のおける情報源を選別するための基本的知識をもつことは、情報の真偽や質を見極めるうえで役に立つ。このような情報選択の能力は情報リテラシーの要といえるものである。与えられた情報を鵜呑みにするのではなく、批判的に識別・評価して主体的に活用する能力が求められている。

さらに、情報は常に人の手を経て伝えられるものであることを認識することが重要である。これはインターネットに限らずあらゆるメディア利用に当てはまることであるが、情報の作り手・送り手の意図を読み取り、情報を批判的に読み解くためのメディアリテラシーが必要とされる。

情報リテラシー、メディアリテラシーは、情報を受信し活用するのみならず、情報を発信・伝達する場合にも必要とされる能力である。インターネットで「書く」際にも、自らの意図するところを、適切な手段を用いて、受け手の状況を考慮しつつ、わかりやすく表現しなくてはならない。さらに、インターネット上でのマナーやモラルを守り、他人の権利やプライバシーを侵害しないことや、公序良俗に反する表現を慎むことには、特に留意しなくてはならない。

## 生きた外国語・言語の質

「日常英語に慣れていず、理解できない内容も多々ある」「すべて外国語だと理解できない」「理解に苦しむ（レベルが高い、専門用語が多い、など）」  
「インターネット上の外国語は日本語と同じく乱れてきているらしいので、あえてインターネットを使う必要性を感じない」「（問題が）あるとすれば、“ノイズ”が多いという点。正しい語法が使われているとは限らず、論理的飛躍が多々見られる文章の存在は気になる」

日ごろ外国語を日本語の解説付きで学ぶことに慣れた学習者が、生の外国語環境に戸惑いを覚えるのは当然かもしれない。インターネット上の外国語は教科書のように編集を経た安全なものばかりではない。一般人が思いつきで書いた文章があふれており、学習者を恐れさせるに足る不適切な表現や、学校の作文では減点されるような書き方は少なくない。しかし、これが一般人の言語使用の実態なのであり、模範的文章を読み書きすることだけでは対応しきれないものがそこにはある。実際、本物の外国語に触れるためにはるばる海を越える旅を要した時代とは異なり、グローバルな情報ネットワーク環境によって、居ながらにして外国語による生の情報を入手したり、一般の外国語話者と接触することが可能となっている今日、外国語の学習は、これらの機会に対応し、与えられた機会を生かすことをその目標の一つとするべきであると思われる。このためには、そこでの言語使用実態に対応することが前提となる。

インターネットで用いられる言葉の多くは「書かれた話し言葉 *langue orale transcrit*」であるという指摘がなされるが、その特徴として、非論理的構造、顔文字を含む独特の表現形式・言葉遣い(SMS 文体など)の存在などが挙げられる。しばしば非難される誤字脱字、正書法・文法の誤りなど、インターネットでの“乱れた”言語使用は、「生きた言語」の証しでもあり、蔑み、無視すればすむというものではない。インターネットにおける言語使用の実態と特徴を理解し、適切に対処するための柔軟な態度を持つことが必要である。

インターネットでの言語活動は、情報収集、メッセージ交換といった特定の目的をもった活動であり、「意味」に焦点をあてた活動である。必要以上に形式にこだわったり、すべてをわかろうとするのではなく、活動目的を絞り込み、さまざまな方略を駆使して、情報を意味的に処理していく態度が必要である。指導にあたっては意味と形式のバランスに配慮することも必要だろう。

また、情報の処理に量とスピードが求められることもインターネットの特徴である。限られた量の原文を精読する学習だけではインターネット上の言語情報量には対応できない。多読、速読の訓練が求められる。

## 学習習慣・態度

「パソコンを見ながらでは疲れる。プリントアウトしてしまう」「手で書いて覚えるということができない」「自主性がないと続けられなさそう」「指導・アドバイスがないと誤りにも気付けないように思うので不安」

最後に、主に学習習慣や学習態度に関わると思われるいくつかの点を指摘しておきたい。

コンピュータ画面上で読む作業が与える肉体的な負担は、医学的に指摘される場所であり看過できない。これに対処するには、パソコン画面上での作業量を自律的に調整し、作業の必要性に応じてパソコンと他媒体(印刷物)とを適切に使い分けることも大切である。オンラインでしかできない作業とオフラインでも可能な作業があり、プリントアウトして読むに相応しい材料もインターネット上には存在する。いわゆる「ネット中毒」のように長時間インターネットにのみ向かうことはもっとも避けるべき態度であろう。

一方、書く作業については、手を動かすという身体的な行為による学習効果はパソコン上の通常の操作では得られない。学習のタイプを音声型・視覚型・身体型と三種に分けるならば、身体型の学習傾向を示す学習者にとって、パソコンでの書く行為は学習には適さないということが考えられる。しかし今後、入力デバイスの進化・多様化により、手書き入力が今よりも一般化することも考えられ、改善が期待される。

膨大な情報・コミュニケーションの可能性を秘めたインターネットを前にして、これをいかに活用できるかは、利用者の自主的な態度、学習意欲にかかっている。与えられる情報のみで満足するのではなく、自分が必要とする情報を進んで求める態度、積極的にコミュニケーションをとる態度が重要となる。また、インターネット上の読み書き活動は「目的」をもった活動であるべきである。言語の質に関しては上ですでに触れたが、文法的な正しさは、実際の言語活動においては、通常それ自体が目的となるものではない。正しい・正しくない、正解・不正解といった二項対立の思考・発想を脱し、自らの設定する目的を達するために、持てる言語能力・方略を駆使した柔軟な言語活動を行うことが、インタ

ーネットを使った読み書きには重要であり、問題解決型の学習が推奨される。

\*\*\*

情報環境の急速な変化によって、私たちは、いつ使うかわからない外国語をコツコツ学ぶという時代から、パソコンを立ち上げインターネットに接続すれば生きた外国語の世界が広がる時代、その気になればすぐにも外国語を実践できる時代、そしてそれが個人の可能性を広げるかもしれない時代を迎えている。このような環境は、学習者にとって学習モチベーションを高める可能性を持つ一方で、読み書き活動に求められる能力を複雑にし、学習指導上多くの注意を必要とすることが理解される。ここでは、インターネットの読み書き活動に求められる能力や注意すべき点を、コンピュータやIT機器の基本操作、ナビゲーションとハイパーテキスト、情報選択とメディアリテラシー、言語の質、学習習慣や態度という五つの面から整理したが、取り組むべき課題があまりにも多いことに気づかされる。

実際のところ、インターネットの読み書き活動に必要とされるこれらの能力の開発は、外国語科のみで扱いきれるものではなく、情報科さらには国語科等の他教科の教育成果と相乗的に得られるべきものが多いことが強調されよう。小・中・高校で近年繰り広げられている情報化への取り組みについては、文部科学省のサイト上に詳しい情報が掲載されている（「小・中・高校教育に関すること（情報化への対応）」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/main18\\_a2.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/main18_a2.htm)）。これらのさまざまな対応や動向に注目しつつ、可能であれば教科間の連携を求めることも有効であるかもしれない。